



Title	KT2コーディングシステムによる雑誌分析：週刊誌『アサヒ芸能』七十年代の目次より
Author(s)	景山, 佳代子
Citation	年報人間科学. 2002, 23-2, p. 213-227
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/10882
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

KT2コーディングシステムによる雑誌分析

—週刊誌『アサヒ芸能』七十年代の目次より—

景山
佳代子

〈要旨〉

KT2システムとは長文のテキストデータをコーディングするためのコンピュータプログラムである。本稿は雑誌分析にKT2を利用するとの有効性を明らかにすることを目的としている。

まずKT2の特徴と今回利用するデータについての説明を行う。つぎにKT2の利用手順と、そのコーディング結果を示す。そして最後に雑誌分析におけるKT2の利用可能性を述べる。

キーワード

KT2システム、コーディング、『アサヒ芸能』、一九七〇年代

はじめに

K T 2 システム（以下、K T 2）は、長文のテキストデータをコードイングするためのコンピュータプログラムである。このコードイングプログラムでは、「字種切り」と呼ばれる方式により単語を抽出し、その頻度と出現位置とをグラフ化することができます。

本稿は雑誌分析にK T 2を用いた場合なにができるかを提示することを目的とする。はじめにK T 2の特徴と今回用いるデータについて説明する。つぎに実際にK T 2プログラムを実行させ、その手順とコーディング結果を示し、最後に雑誌分析におけるK T 2の利用可能性を明らかにしていく。

1. K T 2について⁽¹⁾

雑誌に限らずデータ分析に際して重要なのがコーディング作業である。コードは分析の基本となる要素であり、コーディングがいかに為されるかは、それにつづく分析の成否を左右するといつてもよい⁽²⁾。とくに従来の雑誌分析の多くが、記事中のテーマ／言葉の頻度からコードを導出し、それらのカテゴリー化に焦点をあわせていることを考えるなら、コーディングがいかに重要な作業であるかは即座に理解されよう。

ではこのようなコーディング作業をK T 2というコンピュータ

プログラムで行う事の利点は一体どのような点にもとめられるのだろうか⁽³⁾。まず第一にあげられるのは、コンピュータというツールを利用することによってコーディング手続きが明確化されるということである。コンピュータでのコーディングではルールは一定に保たれ、手作業の場合のように、時間の経過とともに判断基準が揺らぐようなことはない。これは分析の「妥当性」と「信頼性」を確保するための必要条件もある。しかもコンピュータ上での作業はすべて保存可能なので、第三者に対してコーディング基準を明示することも容易である。

二つめの利点は、K T 2の特徴ともいえるクロス表によるコーディングの結果表示である。K T 2は切り出した抽出語の出現頻度をその出現位置とのクロス表の形でグラフ化できる。分析者は、抽出語の出現状況をグラフ上で絶えず比較しながら、それらを分類・統合し、コードを作成していくことができる⁽⁴⁾。これはデータの文脈にそつて分析者があらかじめ、ある文字列をどのようにコード化するかを決定する、従来のコーディングプログラムと大きく異なる。つまりK T 2の場合、コードの柔軟性は高く、データに埋め込まれているストーリーに拘泥されることなく、コード間の関係を把握することが可能になる。

以下、このような特性をもつK T 2を実際、雑誌分析にどのように利用できるかについて述べていく。

2. データについて

一九九九年十月【アサヒ芸能】編集者数名に対し行つたインタビューで、「アサヒ芸能」編集長をつとめたことのあるN氏は次のように語つている⁽⁵⁾。「週刊誌（の記事）を一本か二本、読んでから買う人はいりませんよ。まず買うか買わないか、バラバラは読んでるね。まともに一本でも読んでから買うっていう人はまず、いないですね。見出しど、バラバラの印象ですよね。」同様のことは他の編集者の口からも語られ、中吊りや週刊誌の表紙に飾られる見出しは、読者がどの週刊誌を手に取るかを左右する重要な決め手であると認識されている。このことは週刊誌の目次が読者を惹きつけるためのキヤツチコピーとして機能し、またそれを十二分に意識している作り手側は、目次タイトルに自身の雑誌を強烈にアピールする言葉を使用していたと考えることができる。よつて本稿では「アサヒ芸能」の目次というテキストデータに注目する。

利用する目次は一九七〇年から一九八〇年までの十一年分で、テキストファイルにして340KBайトになる⁽⁶⁾。一年分はおよそ五十冊前後で、一冊あたりの目次タイトルは十五本前後になる。目次の中には、「愛憎事件を演じたこの憎まれっ娘」（七十年一月二九日号）という見出しのあとに、「有名ドラマーを再起不能にした年上妻」「社長の契約夫人が自殺したあと」「夫をコケにした人妻の浮気生活」といった複数の小見出しをもつものがあるが、これら小見出

しもすべて入力の対象とした。一方、「仙人部落」（漫画）や、「どてらい野郎」（小説）、「おれは野次馬」（コラム）のような連載もののタイトルについては、今回の入力の対象からは外している。

3. コーディングのための準備作業

KT2を利用するためにはいくつかの準備作業が必要になつてくる。まず第一の作業はKT2でデータを読み込ませるために、データの最初と最後に「BODY>」、「BODY<」というタグを振ること。つぎにテキストデータの形を整えることである。KT2では漢字・カタカナ・ローマ字という文字の種類別に単語を抽出する「字種切り」という方式を採用しており、たとえば「年末年始スター」の「ゴシップ大特集」というタイトルでは「年末年始」「スター」「ゴシップ」[大特集]という単語が抽出されることになる。しかし今回利用する目次のようなデータでは、字数が非常に制限されているため「月収一千万円金髪千人斬り」といった句読点を省略した表現が多くなる。この場合、KT2では「月収一千万円金髪千人斬」を一語としてカウントしてしまう。よつてKT2が適切に単語の抽出を実行するよう「月収 一千万円 金髪 千人斬り」というように、単語に区切るためのスペースを挿入する作業を行つてある。

つぎにKT2の特徴であるクロス表の作成のためには、縦軸と横軸の二本の軸が必要になる。一本の軸は抽出コードによって決定されるが、もう一つの軸はデータ中には存在していない。この軸を設

定するのがH T M Lタグと呼ばれる記号で、<H1>～</H1>と表記され、分析者はこのタグを埋め込んでいくことでクロス表を作り立たせるためのもう一本の軸をつくるのである。このタグをふる位置については、クロス表の結果をみながら適宜変更することが可能である。

本稿では一九七〇年から一九八〇年までの目次をデータとしているので、一年毎にこのタグをふっている。つまり横軸に抽出コード、縦軸に一九七〇年から一九八〇年までの時間軸がくるよう設定した。もし雑誌における編集長の影響といったものを知りたいのであれば、編集長の交代した時期毎にタグをふることもできる。以上の手続きを踏まえた上でKT2を実行する。

4. 用語の抽出

KT2を実行するとテキスト中の用語が抽出される。だが当然のことながらそのままではカウントされる用語はあまりにも膨大な数になってしまふ。またKT2の「字種切り」という用語抽出の方式では、抽出されない言葉もある。こうした必要な用語の抽出と不要な用語の抽出の停止という作業のために用いられるのが、「複合語」「停止語」「復活語」の三つのウインドウからなる辞書機能である。KT2では抽出された用語はすべてその出現位置と出現頻度の順でそれぞれのウインドウに一覧表示されるので、分析者はこの一覧を参照しながら辞書を作成していくべきよ。たとえば「ポン引き」の

ような言葉の場合、抽出されるのは「ポン」という語だけである。よつて「ポン引き」を一語として抽出するよう登録しなければならないわけだが、そのときに使用するのが「複合語辞書」である。この辞書窓に「ポン引き」と登録し保存すれば、KT2はこの用語を抽出するようになる。またKT2では平仮名は抽出されないので「おんな」といった平仮名だけの単語の場合も「複合語辞書」に登録する必要がある。

つぎに抽出される数が多くなり、カウントしても意味のない語の抽出を停止させたいときには、「停止語」の辞書窓にその単語を登録すればよい。たとえば今回のコーディングでは「特集」といった枕詞のように出でてくる単語や「ホント」という相づちのようによく使われる表現を「停止語」として登録した。また「ヤツホー」「ラリホー」といった用語も同様に処理した。

またKT2では一字のみの漢字は抽出されないので、そのような言葉で抽出する必要があるものについては「復活語辞書」に登録していく。たとえば今回のコーディングでは「妻」や「女」「客」といった単語を登録している。

これら辞書の作成は本文の変更はしないまま、抽出する用語を変更させる手続きであり、さらにはどのような用語をあえて抽出し、反対にどの用語をコーディングから削除したのかといったコーディングルールの明確化にも重要な意味をもつてゐる。そして分析者は登録した用語もまた参考しながら、コーディングを進めていくことができるるのである。

5. 抽出語によるグラフ作成

以上の作業手続きを繰り返したわけだが、それでもなお抽出された用語は三万語以上にのぼった。本稿ではこのうち出現頻度が十五以上、出現頻度の順位でみると上位二三六までの単語に限定し、グラフを作成していく。ただし三十六もの単語をなんのオリエンテーションもなく扱っていくことはかなり難しい。

そこで2節でも述べた週刊誌における目次タイトルの重要性を考慮し、まず総出現度数が一〇〇以上のコードについてのみグラフを作成する。このグラフにおいて出現状況が目立つコードを七十年代「アサヒ芸能」を特色づける要素とみなして残りの語を選別していくという手順をとることにする。この場合、対象となるコードは十三種類で、これらコードを横軸とし一九七〇年から八十年の十一年を縦軸にとったグラフが図1である。

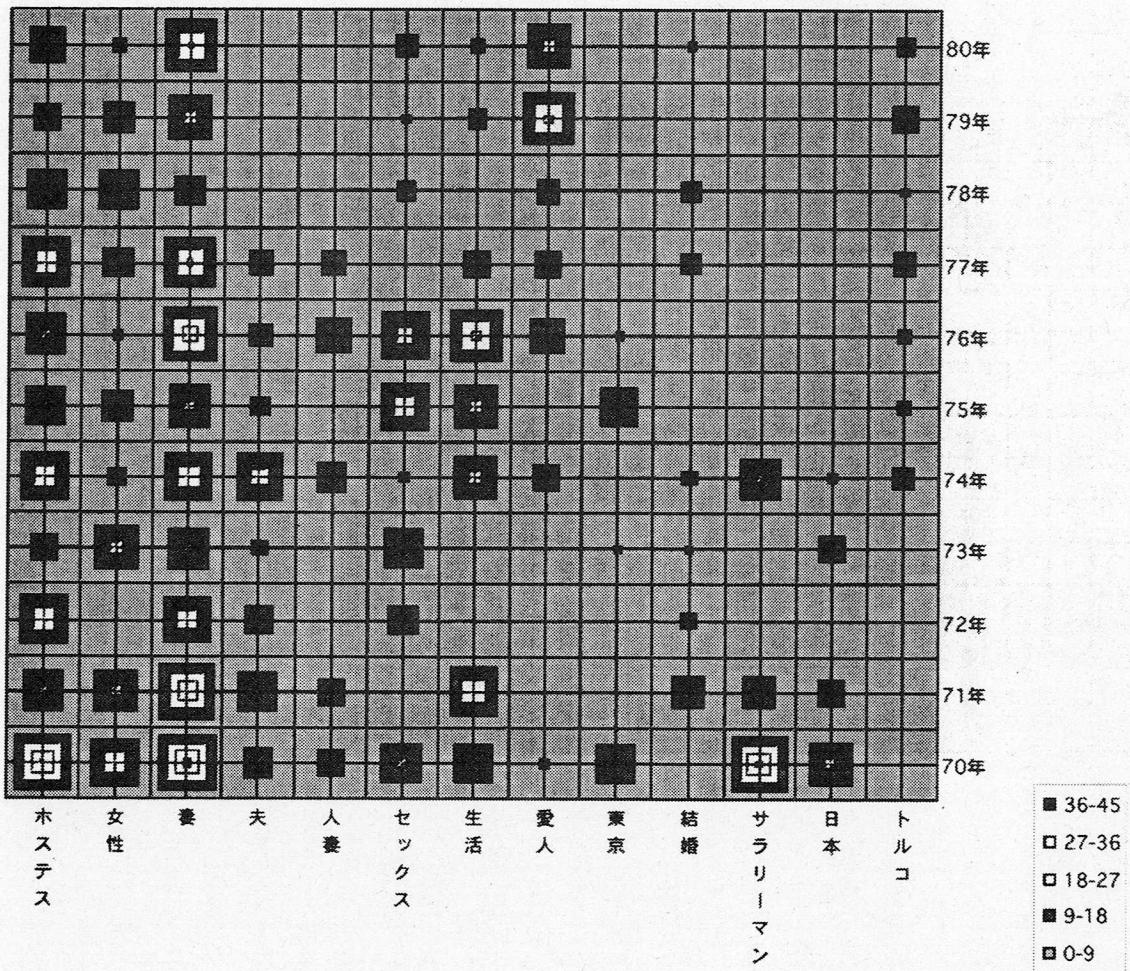
コードの出現状況を具体的に見る前に、このグラフの見方について簡単に説明しておく。グラフは等高線グラフを真上からみた形になつておらず、グラフ上の四角の面積が大きければ大きいほど、四角の重なりが多いほど、その年における語の出現頻度は高いことを意味する。また図の右下にはグラフの目盛間隔と目盛の最大値・最小値が示されており、このグラフの場合、目盛間隔は九であり、出現頻度が〇から九の語については四角が表示されない設定になっている。たとえば「東京」というコードをみると七一年、七二

年は出現頻度の表示がないが、実際には七一年に九回、七二年に五回、出現している。ただし図1の場合、全体の出現頻度からみて、九回以下の出現はコード間の出現状況を把握するのにあまり適切でないと判断したので十回以上出現しているものについてのみ表示されるよう設定しているのである。さらにこのグラフの最大値は四五であり、四六回出現しているものも六十回出現しているものも四五以上の出現ということで一律に表示されているが、この設定も先ほどの理由と同じである。このように目盛間隔や最大値・最小値はコード全体の出現状況をみながら適宜変更していく。

では実際このグラフからはどのようなことがわかるのか。まず見てすぐに明らかなのは「ホステス」「女性」「妻」が非常に多く出現していることである。さらに「セックス」や「生活」も十一年間を通じてほぼ出現していることがわかる。またこれらコードと関連のありそうな「人妻」や、「愛人」、「トルコ」といったコードも十一年という時間を通じて比較的よく出現している。

よつて今回の議論では、七十年代「アサヒ芸能」を特色づけていたと考えられる「妻」「女性」「ホステス」「セックス」といったコードを手がかりにして、グラフの精緻化をすすめていく。そのため最初に必要になるのが抽出語の精選である。つまりKT2で抽出された、残り約二二〇語のなかから、さきのコードとの直接的な関連性を認められない用語（たとえば「競馬」や「八百長」「殺人」といふたものを削除していくのである。削除した語については（要望があれば）第三者の参照が可能な状態で記録されている。これによつ

出現頻度100以上の用語一覧：<図1>



て最終的に二三種類、総出現度数六一九二となる語を抽出した。

これらの語からクロス表を作成し、その出現状況によつてコードの統合をすすめていく。

6. コードの統合

データから一定のルールに従つてコードを抽出することは、分析の基本となる要素を抽出することであり、それゆえコーディングが重要な作業になることはすでに述べたとおりである。しかしバラバラのコードを抽出するだけでは、分析作業に入ることができない。コード間の関連をみながらそれらを適切に統合していく作業が必要になる。この統合作業が不適切に行われるなら、いくら一定のコーディングルールに従つてコードが抽出されたとしても意味がなくなってしまう。それではコードの統合はどのようにすすめられるのか。

おそらくこの統合作業でもっとも一般的に注目されるのはコードの「意味」であろう。たとえば図1にある「ホステス」「人妻」「トルコ」「愛人」というコードを統合すると仮定してみる。もし「意味」にのみ注目したなら、たとえば「職業／職業でない」という基準に

によるものか、であろう。

K T 2はコードの抽出とその出現状況とを明示してくれるプログラムであるが、最終的にコードの統合は、分析者の手作業によるしかない。だが少なくともK T 2を利用すれば、なぜあるコードとあるコードを統合していくのかについて「意味」のみに依存しない形ですすめていくことが可能になる。さらに付け加えるなら、K T 2を利用した場合、コードの統合作業の保存が容易になり、どのような統合を行つたのかを第三者に提示することや、なにより自身の統合作業を何度も繰り返し検討することができる。

切なものであつたかどうかを検討することはできない。さらにそれは分析者の認識枠組みを分析に無批判にもちこんでしまうことも考へられる。しかし「意味」にのみ依存していくは、この統合が適切なものであつたかどうかを検討することはできない。さらにそれは

意味する。

では図1のグラフを参照した場合はどうだろうか。たしかに「ホステス」と「トルコ」を、「一般に男性を客とするサービス業」と考えるなら二つは関連があるコード同士だと見える。しかしこの二つのコードが統合可能な関係にあるかと考えたとき、その出現状況のズレから、これは別々のコードだと判断することになる。当然これ

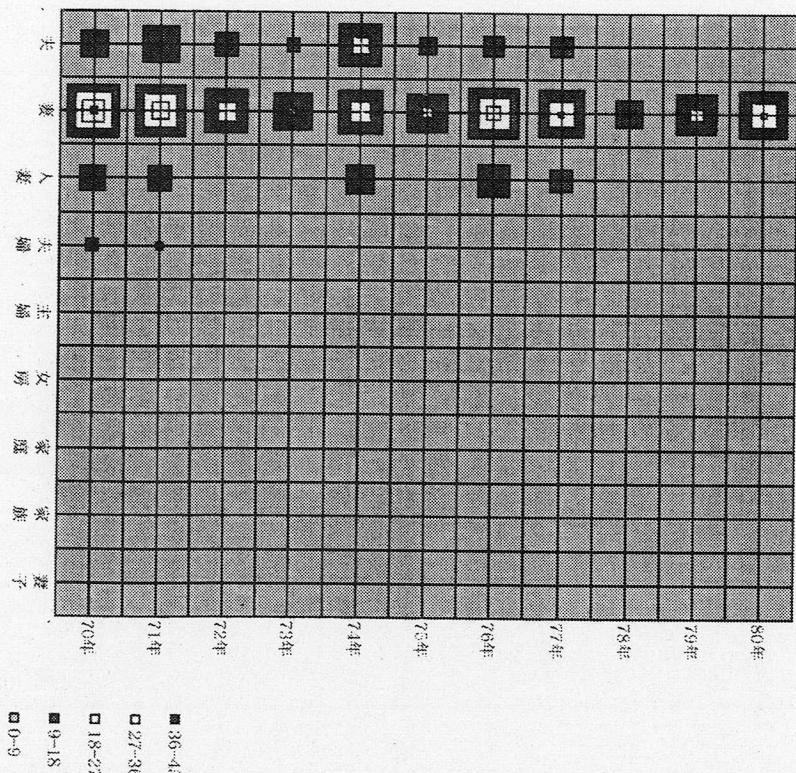
とは逆の場合も起こりうる。つまり「キリン」と「電話」という二つのコードがグラフ上で全く同じ出現状況を示しているからといって、この二つのコードの「意味」が全く違うことを無視して統合することはできない。この場合、むしろ分析者が考えるべきは、この

7. グラフを利用した統合作業・出現頻度の場合

出現頻度によるグラフ<図2>

論者は以上のKT2の利点を活用するようコードの統合作業をすすめていったが、(1)である問題が生じた。百種類以上にのぼるコードの出現頻度を一度にグラフ化しようとした場合、頻度の基準をいかにとるかが大きな問題となる。(つまり出現頻度が最大のコードでは十一年間で二三八回もカウントされているのに対し、総出現頻度が十五回のコードも多数存在しているのである。このためグラフを作る場合、出現頻度の多いコードに基準をあわせれば当然、出現頻度の少ないコードはグラフ上に出現していない形になってしまつ)。逆に頻度の少ないコードに基準をあわせれば、一定以上の出現頻度を示すコードはグラフの縦軸すべてに出現することになり、出現状況を確認しながらコードの統合を行う、というKT2のメリットを活かすことができない。

図2は出現頻度によってコードの出現状況を示したグラフである。このグラフでは「妻」「夫」「人妻」「夫婦」以外のコードはグラフ上にあらわれない。またこれだけでは「妻」と「人妻」を統合してもよいかどうか判断がつきかねる。このため出現頻度の違いでグラフをいくつかに分け、グラフ毎に最大値と目盛間隔を変更するなどの作業を行つた。しかしこのようにグラフ毎に異なる基準を設定する方法が適切かどうかはかなり疑わしい。



8. グラフを利用した統合作業・出現率の場合

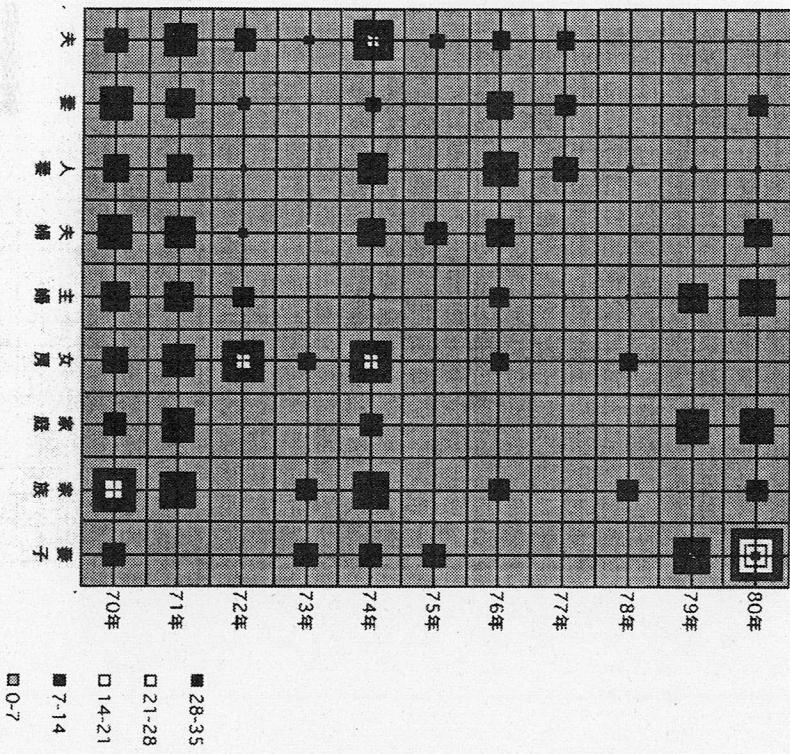
そこでコードの統合をすすめるために本稿では便宜上、各コードの出現率をグラフ化するという作業手順を踏んだ。出現率は（各コードの年毎の出現数）÷（当該コードの総出現数）×100で求めたもので、これによって出現度数の多いコードも少ないコードも同一基準でその出現状況を把握することができるようになった。

図3は図2と同様のコードを出現率によつてグラフ化したものである。ここからは図2では判断のつかなかった「妻」と「人妻」というコードが単にその意味だけでなく出現状況も非常に似ていることから、統合が可能であることがわかる。またKT2では抽出語をもとのテキストデータにおける出現位置で同時にみるのも可能なので、「家族」と「家庭」のように統合の判断に迷うものの場合は、その語が使われている文脈を参照するのも可能である。ハンドルコードの出現率からみた出現状況・コードそれ自体の「意味」・コードが登場する「文脈」の三つの基準を参考しながらコードの統合をすすめていった。

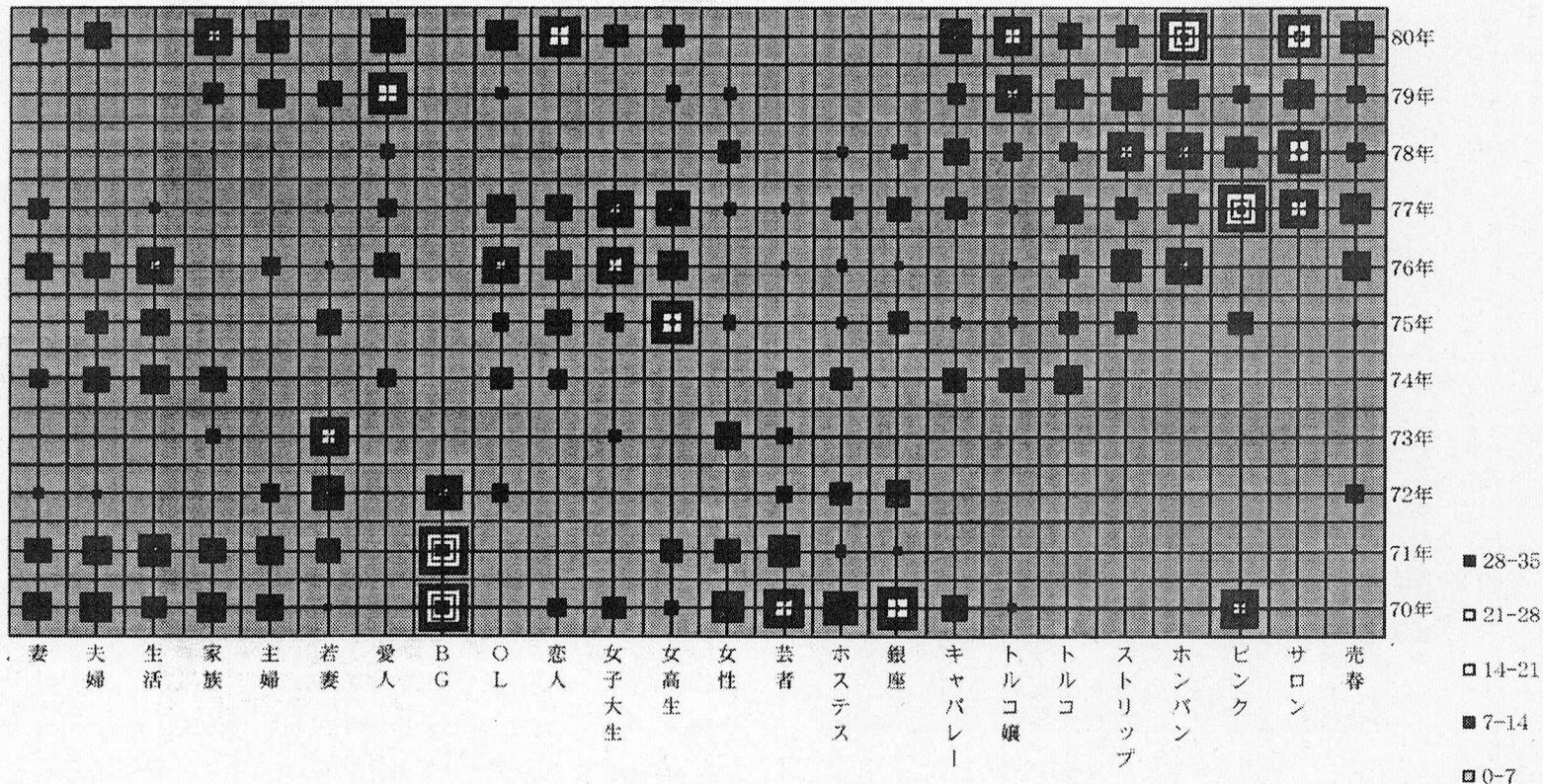
9. 七十年代『アサヒ新報』の鳥瞰図

七十年代「アサヒ新報」の傾向を把握するための基本要素とした、「妻」「女性」「ホステス」「セックス」という四つのコードの「出現状況」「意味」「文脈」を手がかりに上述の作業を繰り返した結果、

出現率によるグラフ<図3>：単位%



70年代『アサヒ芸能』鳥瞰図<図4>：単位%



論者は暫定的ではあるが、総出現度数三八六、単語三十種からなる、二四コードを抽出した。これらコードの出現率に基づいて作成したのが図4のグラフである。

グラフ左部分に集まっているのは「妻」をキーワードとするコード群で、「夫婦」「家族」「愛人」などからなる。つぎにグラフ中央部分に集まっているのが「女性」を手がかりとしたコード群で、「BG」「OL」「恋人」「女子大生」「女高生」からなる。グラフ右部分に集まっているのは「ホステス」をキーワードとするコード群で、「芸者」「トルコ」「ホンバン」「サロン」などからなる。これら三つのコード群内には出現状況の共変性と逆転性という二つの変動のうちのいずれかが見いだされる。そしてこれらのコード群を見てすぐに気が付くのは、三つのコード群がある「意味」のまとまりをもつていていうことである。この「意味」のまとまりを、七十年代「アサヒ芸能」の基本要素と関連させて考えるなら、これらコード群が表しているのは、三つの性生活の場面とそこに登場しうる「おんな」とみなせる。よってこれら三つのコード群を左から、性生活と関連する「家庭の場」／「恋愛の場」／「遊びの場」カテゴリーと呼ぶことにし、グラフから各カテゴリーの特徴とカテゴリー間の関連についてみていく。

まず「家庭の場」であるが、このカテゴリーを構成するコード群はよく似た出現傾向を示している⁽⁸⁾。七十年代初めと七十年代半ばにほとんどのコードが比較的多く出現していたにも関わらず、七十年代後半になると8%以下の出現率しか示さなくなる。唯一、他の

コードとは逆転の出現傾向を示しているのが「愛人」で、七十年代後半になって比較的高い出現率を示すようになる。またこのコード群には「生活」というコードも加わっているが、これは図1でみた「夫婦」と「生活」を並べて配置することにした。

つぎに「恋愛の場」であるが、「BG」と「OL」は同一コードに統合してもよかつたかもしれないが、言葉の時代性が非常にはつきりと出ているコードであつたため、今回の議論には直接関わらないがあえて統合しない形で残しておいた。この「恋愛の場」のコード群に特徴的なのは、みてすぐ分かるとおり七十年代半ばに集中して出現しているということである。そしてまた八十年になつて一様に出現する。さらにコード間の関連に注目してみると、「OL」「女子大生」が出現率の増減においても類似した出現状況を示していること、これら二つのコードと「恋人」の出現状況も類似していることが指摘できる⁽⁹⁾。またそれほどはつきりとした差異ではないが、「女高生」というコードが他のコードと比較して微妙なズレを見せていく。

このグラフの右に配列した「遊びの場」は、このグラフ全体でみたときに最もダイナミックな出現状況を示しているカテゴリーだとえる。七十年代前半に出現した「芸者」「ホステス」が後半にいたつてほとんどみられなくなる一方で、「トルコ」や「サロン」「キャバレー」といったコードの出現率は七十年代後半に集中する形をみ

せている。これは「遊び」カテゴリーにおける前者から後者へのはつきりとした移行を示すものである。そして「芸能者」や「ホステス」が「遊び」のなかでも、会話や客との駆け引きをイメージさせるコードであるのに対し、「ボンバーン」というコードが端的に示すように七十年代後半に出現するものは、より直接的に「セックス」をイメージさせるコードとなっている⁽¹⁰⁾。非常に興味深いことは、こうした出現の仕方が「生活」というコードが出現しなくなる七六年を境に顕著になつていることである。

最後にグラフ全体でみていくとき、そこには「家庭」→「恋愛」→「遊び」という七十年代を通じてのダイナミックな移行がみられる。そしてここから七三年を避け目とし七四年から七六年までを端境期とするような七十年代の時期区分が見いだされる。ではこのようない変遷は一体なにを意味しているのか。目次のみをマテリアルとする本稿では当然これへの回答を用意することはできない。しかしこの問いの発見こそが目次をマテリアルとした本稿の意義だといえる。

10. K T 2による雑誌分析の有効性

以上、K T 2によって七十年代「アサヒ芸能」の目次を分析した結果、9節でみたような枠組みを得ることができた。ここから雑誌分析にK T 2を利用した場合の有効性ということについて考えてみたい。

まず第一に、もしK T 2を利用しなければ週刊誌十一年分、つまり約五三〇冊分の目次データを一度に、しかも同一のコーディングルールによって分析することは大変困難な作業となつただろう。さらにK T 2で作成する「辞書」は保存しておくことができるので、今後、別の時期・別の雑誌について分析を行う場合でも、同一のルールを適用した分析を容易に行うことができる。このことはコーディングの効率化を促すだけではなく、コーディングそれ自体の信頼性を高めることになる。

つぎにK T 2のコードは「単語」単位で切り出されるので、分析者は対象とする雑誌が用意する文脈からの自由度を比較的高くすることができる。これがなぜ重要なかを理解するために、仮に「アサヒ芸能」の分析を、そのタイトルやコーナーの趣旨といった文脈によってコーディングしていく場合を考えてみよう。このときあるタイトルはその文脈から、「芸能」について取り上げているもの、別のタイトルは「政治」についてのものとしてカウントされる。そうすると分析の結果はおそらく、目次タイトルを見てうける印象を数値化したものとなるだろう。これも確かに一つの「発見」ではありますかもしれない。しかし重要なのは、雑誌の用意する「カテゴリー」がどの程度出現しているか以上に、雑誌が自明なものとしている分類、もつといえども読者である我々自身もまた雑誌と共有している世界の分節化が、一体どのような「要素」とその配置によつて成り立つているのかを分析していくことではないだろうか。そのため必要となるのが、既存の分類枠組みをいつたん「要素」へと分解

するという解体作業である。文脈から自由になるとは、分析者が雑誌の用意する見かけのカテゴリーから距離を取るということであり、KT-2を利用すれば、この作業が比較的容易に行えるようになる。

それによつて本稿では、「アサヒ芸能」が取り上げる、性を伸立ちとしたジエンダー関係が、その表面上の同一性とは裏腹に、七十年代という時代においてある変遷をみせていたことを明らかにすることができた。そしてここで得られた要素とその変遷は、より具体的な記事内容の分析をすすめる際の重要な指標となるのである。

注

- (1) KT-2システムは、谷口敏夫（京都光華女子大学）と川端亮（大阪大学）の共同開発によるものである。KT-2の詳細な利用方法などについては谷口（一九九九）と川端（一九九〇）を参照のこと。本稿では実際にKT-2で雑誌分析を行う場合、どのような手順をとるのかに焦点をあわせてるので、KT-2の説明については、その作業手続きを理解するために必要な範囲に留めてくる。
- (2) 質的データのコーディングについては、R・エマーソン他（1995=一九九八）、J&L・ロフランド（1995=一九九七）らに詳しく述べる。
- (3) 欧米ではコンピュータを利用した質的データの分析CAQDA（computer aided qualitative data analysis）は、一九六〇年代頃から人文科学の領域で一般的になつていった。Seale(2000)はCAQDAの利点として、(1) 大量データのすみやかな処理、(2) 分析手続きの厳密化、(3) グループ調査の簡便化、(4) サンプ

ル決定の手助け、という四つをあげている。日本では日本語がシンピュータ言語に馴染みにくいといった理由などにより、まだ一般化されたとは言い難い状況にあるCAQDAだが、質的研究が盛んに行われている現在、その利用可能性を検証することは決して無駄ではないだろう。

(4) グレーナー＆ストラウス（1967=一九九六・一四五一一六七）の「絶えざる比較」という作業手続きを参照。

(5) インタビューは一九九九年十月二六日現在で、「アサヒ芸能」編集部OBのF氏、O氏、前編集長N氏、編集長H氏の四名とのグループインタビューという形式で行った。

(6) 今回の目次資料の収集にあたつて、徳間書店「アサヒ芸能」編集部をはじめ、徳間書店関係者の方々から多くの御協力を頂いた。謹んで御礼申し上げます。

(7) 「生活」というコードは、「ホステス」「妻」「女性」「セックスクス」というコードと比較したとき、意味の点においても、出現状況からも、どのように扱うのが適当かがわかりにくいうコードである。このようなコードは、注意深く扱う必要がある。

(8) たとえば「家庭の場」についてのタイトルとしては「団地妻の「浮気を楽しむ会」」（七十年一月一日号）や「浮気相手に五十万円抜かれて、女房には叱られて」（七三年三月九日号）、「駐在サンと一児を連れて駆け落ちした人妻蒸発五十日間」（八十年六月十二日号）といったものがある。

(9) 「恋愛の場」として考えられる目次としては、「新人BGを誘惑して捨てるゲバルト社会学」（七一年四月十三日号）や「中年のみなさん！OL・女子大生をこうして口説いてみませんか？」（七六年六月十日号）、「恋人募集中 ジュリーミたいな男いないかな」（八十年八月七日号）などがあげられる。

(10) 「遊びの場」として考えられる日次には、「チラリと見せた上州新者のかわいげ」(七十年四月三十日付)、「七四年 風俗異変トルコ文化崩壊必至 現代湯女はどうへ行く」(七四年一月十日付)、

「しゃって放すなー」シノクサロン開店前のマル秘攻略指令」(七七年三月三日付)、「東西プレイスポートへ上野へ六十分三本勝負 ホステスが入れ替わるホンバンタッグマッチサロ」(八十年十一月二二日付)などがあげられる。

著者の色濃い情け (七十年四月三十日付)、「チラリと見せた上州新者のかわいげ」(七四年 風俗異変トルコ文化崩壊必至 現代湯女はどうへ行く」(七四年一月十日付)、

謝辞

本稿執筆にあたり、周典芳氏・樋口昌彦氏・松谷満氏・柄沢健史氏・寺田勝氏にデータ入力の御協力を頂いた。この方々の御協力がなければ、速やかにデータの分析作業に集中することができなかつた。以上の方々にこの場をかりて感謝の意を表します。

参考文献

- Emerson, Robert M., Rachel I. Fretz, & Linda L. Shaw 1995 *Writing Ethnographic Fieldnotes*. The University of Chicago. (佐藤郁哉・好井裕明・山田富秋訳、一九九八『方法ハンドブック』新曜社)
- Glaser, Barney, and Anselm Strauss 1967 *The Discovery of Grounded Theory: Strategies for Qualitative Research*. Chicago: Aldine. (佐藤隆・大出春江・水野節夫訳、一九九六『データ対話型理論の発見』新曜社)
- 川端亮 1990 | 「カナルヒューラ・コードティングによる宗教的ライフヒストリーの記述」、「宗教と社会」七：1111-1-1511
- Lofland, John, and Lyn H. Lofland. 1995 *Analyzing Social Settings: A Guide to Qualitative Observation and Analysis*. 3rd. ed. Wadsworth Publishing Company. (進藤達也・押川誠訳、一九九七『社会状況の分析—質的観察と分析の方法』恒星社厚生閣)
- Seale, Clive 2000 'Using Computers to Analyse Qualitative Data', in D. Silverman, *Doing Qualitative Research*, Sage, 154-174
- 谷口敏夫 一九九九「今女からの『位置情報付会話録』の抽出」、川端亮編『非定型データのコーディング・システムとの利用』平成八年度一平

Using KT2 System for Text Data Analysis : a Japanese weekly *ASAHI GEINŌ* in the 70's

KAGEYAMA Kayoko

KT2 System (KT2) is computer program for coding text data.

In this paper I try to show how KT2 can be helpful in analyzing the magazine.

Firstly, I will describe features of KT2 and data.

Second, I show you how use KT2 and the results of coding by KT2.

Finally, I conclude with pointing out KT2's practicability for analyzing magazine.

Key Words

KT2 System, coding, *ASAHI GEINŌ*, 1970s